

2016年の「西遊記」 — インドの二つのナーランダ大学 —

三蔵法師の旅

「西遊記」といえば、孫悟空で有名だが、西遊記の登場人物たちが、なぜ苦難の旅を続けていたのかをくわしく知っている人はあまりいないかもしれない。孫悟空と沙悟浄と猪八戒は妖怪で、僧侶である三蔵法師の弟子となって、法師を守りつつ旅をしたが、彼らは、中国からはるばると陸路、天竺国まで、ありがたい仏教のお経をもらい受けに行ったのだ。

この話は実話が基になっている。唐代の僧・玄奘（げんじょう）の経典招来の旅である。玄奘は、経蔵・律蔵・論蔵の三蔵に精通した僧侶（法師）として、「三蔵法師」と言われてあがめられ、ついには、お話の主人公にまでなってしまったのだ。

今でも、学問研究の重要な過程に文献の収集というものがあるが、それは、過去においても変わらなかった。あることがらを学ぼうとすると、それに関する先進地から最先端の文献を持ち帰ることは、留学生の重要な役目である。明治時代には、夏目漱石や森鷗外が当時の学問の先進地であるイギリスやドイツから文献を持ち帰った

し、そのずっと前には、遣唐使や遣隋使を通じて、留学生たちが、当時の学問の先進地である中国から重要な文献を日本に持ち帰った。同じようにして、中国の玄奘も、当時の仏教の先進地であるインドから大量のお経を持ち帰ったのだ。

玄奘は、貞観13年（629年）、唐の長安を出て、ゴビ砂漠の天山北路を西進、パミール高原からインドに入った。そして、インドのマガダ国の僧院で修業。現地の学僧たちからもその学力を認められ、多数のお経を贈られ、持ち帰った。玄奘の旅は、じつに17年にわたり、持ち帰ったお経は、650部にも及ぶが、その中には、「法華経」や「華嚴経」、「大般若経」など、今日でもアジア諸国で広く用いられている仏教の基本経典が含まれている。それらの経典は、その後、中国から朝鮮半島と日本列島を含む東アジアに広がり、今日でも、その地の人々の世界観の基礎ともなっている。つまり、玄奘は東アジアの今日の人々のメンタリティの基礎を築いた人物であるともいえるのだ。

ナーランダの僧院

まさに、その玄奘が学んだ僧院は、今も残っている。

インド・ビハール州ナーランダ。

ここに、遺跡となって残っているのだ。



ナーランダは、当時のマガダ国にあった。ガンジス川の流域のこの地は、インド西部にあり、仏教の生誕の地でもある。ブッダ(ゴータマ・シッダールタ)が、悟りを開いたと言われるブッダガヤは、ナーランダの程近く、また、ブッダが「法華経」など重要な教えを説いたと言われる靈鷲山が属する山脈はナーランダの南を区切る山である。玄奘が訪れた7世紀には、このナーランダには1500人以上の教授僧がおり、1万人以上の学生が学び、9階建ての図書館には十数万冊

の書籍があったと言われる。ヨーロッパで最古の大学であるボローニャ大学やパリ大学やオックスフォード大学が11世紀の創建だから、宗教教育の施設だとはいえ、ヨーロッパに大学ができる数世紀前に作られていた世界最古の大学であるともいえる。だが、1192年に侵入したデリーを拠点とするイスラム勢力によって大学は襲撃され、図書も焼き尽くされてしまった。一説には、この大学の規模があまりに大きかったため、彼らは大学を要塞と間違えたともいう。



写真②ナーランダ遺跡の寺院

遺跡となったナーランダ

そのナーランダ遺跡を、2016年に訪ねた。

遺跡を巡ると、ナーランダ大学玄奘が学び、栄えていたころの姿がよみがえってくる。遺跡は、20世紀初頭から発掘が始まった14ヘクタールに及ぶ広大な領域で、そこにはいくつもの建物が発掘されているが、そのメインは、11からなる僧院と三つの巨大な寺院である。

僧院は1辺が約40mのほぼ正方形をした建物で、中廊下式になっており、外側にずらりと個室の僧坊が並び、中庭を持つ(写真①)。レンガで構築された壁は厚く、発掘された各僧坊に入るとひんやりとした静けさがある。

寺院は数階建てのビルほどの高さを持つ巨大な煉瓦のかたまりとしてある(写真②)。当初はそれほど大きな建築ではなかったようだが、次々に建て増しをされて巨大化したことが発掘から明らかになっているという。内部には、ブッダの遺骨などの聖遺物を収めたストゥーパ(仏塔)があるという。大部分の漆喰などは剥がれ落ちていますが、残存する遺物の様式からグプタ様式(4世紀～6世紀)の建築様式であったと言われる。

遺跡は静まり返っている。

インドの射るような日差しが遺構に強い光を与え、その強い光は濃い影を作る。

ここで、千数百年前に、万を超える人々が、

学問をしていた。

それは歴史であり、もうすぎさったことだから、今ここ、この遺跡を見ているこの瞬間には、ここにはないのは当たり前なのだが、その強い光と影は、そのような歴史があったこと自体を幻のようにも思わせる。

新しい「ナーランダ大学」

この近くに、いま新しい「ナーランダ大学」という国際大学院大学の建設が進んでいる。アジアからの発信を目指して、ASEAN諸国が資金を提供し、インド政府が建設を進めている。インド・ベンガル出身で、ノーベル経済学を受賞したアマルティア・センなどが推進役となって

108



写真③ナーランダ大学の教棟

いる。アジアからの発信を目指す大学をナーランダに作るというのは、まさに、玄奘が学んだナーランダ大学に敬意を払い、それを現代になぞらえようとしてのことである。いずれは総合大学を目指すが、とりあえずは、歴史学部と環境学部をもって2014年に発足した。

ナーランダ遺跡を訪ねたとき、このキャンパスも訪ねてみた。キャンパスは「旧」ナーランダ大学の遺跡から数キロ離れたところに建設されることになっているが、今は、仮設のキャンパスである。旧州立病院の建物を利用した教棟(写真③)や寄宿舎、職員宿舎がある。

7世紀に玄奘の学んだナーランダ大学も国際色豊かな大学でアジア各地から生徒が集まっていたが、この新しいナーランダ大学もインドのみならずアジア全域から来た大学院生が寮生活を送りながら勉強している(写真④、写真⑤)。日本から来た大学院生もいた。みな若く、意気に燃えている。教員陣も、インド出身の教員に加え、広く海外からの教員が集まっており、新しい大学を作り上げる熱気があった。

学問に国境はないし、学問への熱意に時代は変わらない。

廃墟になった大学と、これからつくられゆく大学。ナーランダの新旧二つの大学は、時を超えて学問の意味について考えさせてくれる。

寺田匡宏



写真④ナーランダ大学の図書室



写真⑤ナーランダ大学の学生たち